

インド哲学仏教学

丸井 浩

大学院人文社会系研究科 教授


<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/>

国立大学が法人化すれば、一般社会に目に見える形の果実が還元されない(ように思われる)学問分野の存続は危ういのではないか。こうした警鐘が鳴り響く中で、その筆頭例として印度哲学(略称「印哲」)がしばしば引き合いに出されてきた。印哲の現場に身をおく一人として、まことに複雑な思いがよぎる。(本文へ続く)

印哲は、漢文の仏典を拠り所とする江戸時代までの伝統的な仏教研究の蓄積のもとに、18世紀後半以降めざましい発展をとげた西洋の「インド学」(サンスクリット語などのインド古典研究が中心だった)の成果が、明治時代に移植された結果、誕生した学問分野である。東京大学創立2年後(1879年)にはすでに印哲最初の講義が開かれているが、印哲の講座創設は1916年のこと(これに先立ち、梵語学講座は1901年創設)。今もなお講堂(安田講堂)に名をとどめている安田善次郎氏から巨額の寄付を受けたことによる。現在、印哲は「インド哲学仏教学研究室」という呼称であるが、教授3(インド哲学・インド・チベット仏教・日本仏教)、助教授1(インド仏教)、助手1名から成る。学部生6名に対して大学院生58名(インド文学専攻の10名を含む)という逆ピラミッドの学生構成だが、これは昔から変わらない。主な理由は、学部生の多くが大学院に進学すること、外国人留学生が多いこと(13名)、そして研究・教育職に就くことがままならないことの3点。

「印哲を卒業すれば僧侶の資格が取れますか?」と質問されることがある。取れない。一般に印哲という分野は、私たちの生活に浸透している仏教行事の実践や、具体的な宗派の信仰に慣れ親しむための学問ではない。むしろ仏教やインド哲学の原典をじっくり読む力を養成することに重点が置かれている。世界の諸言語の中で文法構造が最も複雑とも言われるサンスクリット語(梵語)が必修であるほか、初期仏教や南方仏教の聖典語パーリ語、大乘仏教研究に欠かせない古典チベット語、古典中国語(漢文)なども非常に重要となる。加えて、西洋のインド学仏教学の成果を消化するために、英仏独の論文・研究書を読む必要があり、また英語で論文を発表する機会も多い。

原典研究はしばしば写本解読、そしてテキスト校訂作業にまで向かわざるを得ない。いまだに新たな写本が発見されて、仏教史、インド思想史が大きく書きかえられる可能性が秘められ

ている。

しかし語学力を駆使した文献読解の作業が印哲という学問のすべてではない。世界をリードするインド哲学仏教学研究であり、文化勲章受章者であった中村元先生は、東京大学文学部の最終講義において、インド学は過去の遺物を発掘する「エジプト学」であってはならないことを強調された。禅のテキストに「古の教えは心を照らし、心は古の教えを照らす」という名文句がある。さまざまな意味で混迷をきわめた現代こそ、過去の偉大な思想から、「いま、私が、ここで生きる」ことへの指針となるメッセージを学ぶことが大切となる。そのためには、テキストに何が書かれているかを客観的に分析するばかりでなく、テキストを読む人の心、精神の開拓が同時に求められる。

私の専門は、インドの伝統的な哲学諸流派、特に論理的、分析的思考を重んずるニヤーヤ、ヴァイシェシカ両派の思想研究であるが、最近9世紀末にカシミールで活躍したジャヤンタの主著『ニヤーヤ・マンジャリー』(論理の花束)を読み進めている。宗教仏教(広くは文化伝統)をいたずらに破壊しようとする論理を「無味乾燥な理屈」と退けつつ、多様な宗教教義の調和・調停をはかる論理構築にも意を砕くジャヤンタの、機知あふれる「語りの哲学」の魅力を、少しでも一般読者に伝えたいと考えている。

概してインド哲学・仏教思想は、外の世界・社会に対する関心よりも、自分自身や他者への関わり方を内省的に見直すべきだと説いてきた。深い内省と思索の中から紡ぎ出された彼らの言葉を、現代に生きる人々の心に響くような形へと「翻訳」する試みが、印哲の研究者にとって課せられた、「社会への還元」の重要課題をなす。経済的には厳しくとも、自分の、人の心の、そして人間社会の、あらたな可能性を求め信じて、苔むす典籍読解の道に身を投ずる若者の努力に、敬意のまなざしが注がれる社会であることを切に願う。



演習「インド哲学文献研究」の授業風景



インド論理学文献の写本。古写本はやしの葉か樹皮に書かれているが、これは樹皮



インド・プーナ大学のM・デオカル先生と会話中。生まれつき視力がないデオカル先生は、すべてテキストを暗記している



ライトブルー（淡青）の空を見上げてみよう。太陽と白い雲、風が吹いていて爽快である。我々が暮らすこのような地球気候のモデリングが今回の話題である。(本文へ続く)

現代型コンピューターの創始者でもあるフォン・ノイマン博士が、プリンストン大学高等研究所に若手気象学者を集めて、将来有望な計算科学分野のひとつとして「数値気象学」グループを立ち上げたのは1940年代後半である。1950年にはEniacコンピューターによって最初の大規模スケールの気象シミュレーションが行われた。水平分解能は700kmで、高低気圧をうまく再現することが重要課題になっていた。強い非線形性を持つ流体方程式を長期積分することは非常に難しいのである。この問題は、北京で蝶が羽ばたくとその複雑な擾乱でニューヨークに嵐が起きると言う「ローレンツの蝶」の例えを生んだ。

その50年後、アジアの一角で超大型スーパーコンピューターの地球シミュレーターが稼働し、われわれは水平スケール100kmの数値気候モデルを数百年間、積分できるようになった。その結果、例えば、地球温暖化によって変化する日本の将来気候や、全球に広がる大気汚染など、地球の状態について様々なシミュレーションが可能になってきた(図1~3)。これらを詳細に見てみると、この100年間の気候は、太陽出力の変化、火山爆発、人為起源の二酸化炭素やエアロゾルなどの外因で変化していること、数万年スケールでは大陸隆起や地球軌道の変化によって、氷期、間氷期が繰り返されていることがわかってきた。

このようなシミュレーションはさまざまな問題に利用されるが、特に地球温暖化問題は重要である。図1によると温暖化はこれから顕著に現れ始め、21世紀末には1年の3割は真夏日になる可能性がある。その対策には、地域気候を予測できるモデルをどうしても開発する必要がある。いま開発中の次世代型モデルは水平分解能が10km以下になり、東京の山手線サイズくらいの現象を分解できる。このモデルで最近、数値実験をした全球海洋地球の雲を

図4に示そう。なんとなく本物っぽくないだろうか？

ここで紹介した数値気候モデルは、太陽、雲、風、海など気候系に係わる様々な物理化学過程を含んだ非常に複雑なモデルである。気候システム研究センター設立の1991年当時は、大学ではこのような複雑なモデル作りは無理ではないかと言う声もあった。しかし、教員と大学院生のコラボレーションによって高度なモデルが開発されたのである。気候システム研究センターのパンフレット等でシンボリックにもなっている弥勒菩薩は56億7千万年後にお生まれになってわれわれを救済してくれる。その考えにははるかに及ばないが、われわれのモデルは地球を不完全ながらも再現しようとしている。非線形理論からは自明ではないが、今のところ、自然起源と人為起源の様々な要因を取り込めば取り込むほど、数値解はより現実に近づくようである。その意味で、多くの研究者を抱える大学でモデル開発を行うのが、いま、おもしろい。コンピューターの中の地球で、ローレンツの蝶が羽ばたく様子を見てみようではないか。

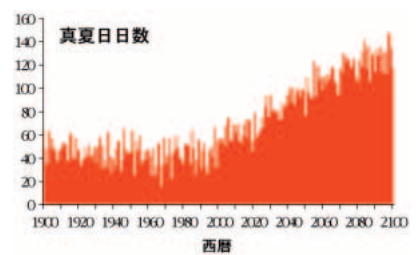


図1 温暖化で起こる我が国の真夏日の将来変化

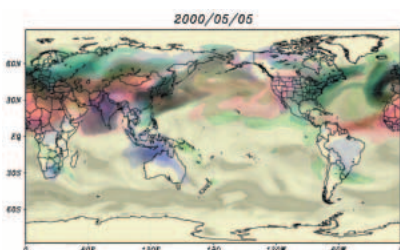


図2 ある日(2000年5月5日)の大気汚染エアロゾルの流れ(硫酸塩:青、炭素:緑)。砂塵(赤)と海塩粒子(灰)も示す

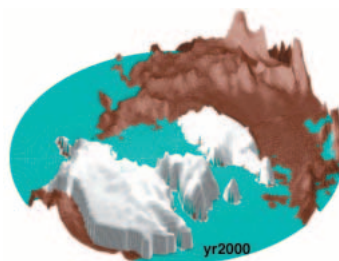


図3 最終氷期における大陸氷床の再現。北極海を俯瞰する

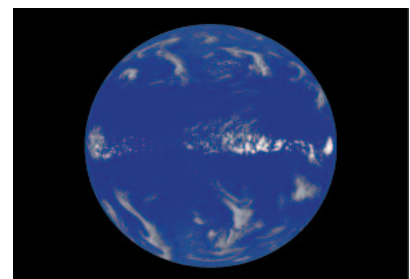


図4 新しい非静力学モデルによる水惑星の雲の再現